

菅沼富雄先輩四方山ばなし

1946年卒業

馬場和夫

昨平成二十年に98歳にて亡くなられた菅沼富雄先輩は歌舞研三田会最高年齢の生き残りの方だった。

僕が「歌舞研八十年史」を作る時 唯一直接に昔話を聞くことのできた貴重な存在だった。同君は昭和45年卒の小柴憲光君の知人で僕との会談を昭和33年卒で藤沢に「久昇」という小料理屋を営んでいる松本幹之助君のお店に設定してくれた。平成十六年四月夜 四時半に鵜沼海岸から菅沼君を招き 小柴君同席でお話を聞くことができた。

小柴君の祖父が塾の教授 叔父さんが菅沼君と同じ鐘紡勤務 父上も医学部で親交の仲だったのである。

当時94歳の菅沼先輩は足もとをかばって杖を突き、やや耳が遠い他は極めて健康で 着席するなり親しく話しはじめられたが その記憶力の抜群さにはいきなり圧倒されてしまった。昔の歌舞伎研究者には 資料なしで過去の上演日時、演目、配役までずらずらと話される方が数多くいらっしやっした。遠藤為春 川尻清潭 伊原青々園等々、中でも渥美清太郎は代表的な博覧強記 文字通りの生き字引で「歌舞伎辞典」という本の原稿を国立から東京までの通勤電車の中で書いてしまったと云う人だったが、菅沼先輩はこの方々にも負けない記憶力で 約5時間近く滔々としゃべり続けられた。小柴君は120分テープを用意してきたが足りなくなり、あわてて買足しに走る始末だった。

同先輩は幼稚舎ではなく商工を経て経済学部に進み昭和九年卒だが、歌舞研は学部に入った昭和六年からの在籍で 加賀山直三 川口子太郎など歌舞伎研究の専門家になった方たちとの同期である。

昭和七年十月に「三田山上各会連盟創立一周年記念」として「曾我対面」の脚本朗読会が開かれた時、朝比奈をやっているが その時の他の部員の役割を忽ち教えてくださった。

同期の友達のひとりひとりについても詳細に渡って話され 勤務先の鐘紡のことも含んでの話は尽きるところがない状態だった。

処が、誠に残念なことにこの長時間テープ録音が このお店の繁盛のお陰でものすごい騒音の中だったため 今これを文字に起こそうとしても殆ど聞きとれず まとまった記録として残そうと思って いた僕はお手上げになってしまった。

然しせっかくの記録なので、極めて断片的にしか綴ることが出来ないが この大先輩の存在を書くことによって 戦前昭和ひと桁時代の歌舞研の姿を偲ぶよすがになればと、以下記述して行くので ご寛恕願いたい。

「僕(菅沼)の同期では河合忠兵衛、浅草の鉄屋さんで 兄貴の鈴木福五郎-これは法政だけど-といっしょに遊んだ。青山学院の鈴木治夫もいたっけ。一年先輩の内田得三は大谷さんに見込ま

れて卒業しないままで松竹へ入っちゃった。松竹へ行ったのはもっと先輩の上沼道之助がいる。あゝ馬場さんの家と近かったんですか。練馬の家へ僕も行ったことありますよ、物識りだったけどね。上沼さんを知っている人も少ないんじゃないかな。加賀山は折口さんの弟子で歌舞研にはあんまり出て来なかったけど、よく勉強してたね。川口子太郎、『一って云うんだけど これたちとは予科祭などでいっしょに働きましたよ。その頃はいろいろな人を呼んで話を聞きました。岡本綺堂 岡鬼太郎 田圃の太夫の源之助 松居松翁など。その松居松翁さんが亡くなった昭和八年に三田大ホールで追悼講演会をやりました（「八十年史 P16」）」
岡鬼太郎さんにお礼の菓子折を持って行ったら、学生さんはそんなことしなくていいと云われた話は「八十年史」P12に書いてある。

「昭和七年の朗読会の「対面」は、工藤が内田、これは麻雀好きの面白い男だった。虎が田坂（劇評家志野葉太郎として健在） 梶原父子が河合と加藤 五郎が川口 渡辺耕一が鬼王だったかな、西園寺忠二（戦死）もいたな。

あの頃は芝居は毎月観て合評会をやった。三田通りの春日神社の脇に明治製菓があり その 3 階の喫茶室に集って脚本朗読もやりました。黄色い表紙の「歌舞伎全集」を持ってきて毎月一回ぐらい。内田がガキ大将で川口 河合 僕 渡辺耕一などでね」

この年（昭和七年）は塾創立七十五周年記念ではじめて公開朗読会を続けて七回やっていて、菅沼が夜叉王を断って金窪兵衛だった話は「八十年史」P14に記載した。

菅沼の在籍した昭和六～九年は戦前の歌舞研の最盛期で 歌舞伎滅亡論などがマスコミにささやかれているのに反抗するように盛沢山の行事を実行している。座談会のゲストとして、岡本綺堂、渥美清太郎、池田大伍、遠藤為春、三宅周太郎、岡鬼太郎、石割松太郎と当時の第一級評論家を網羅し、役者も彦三郎 源之助、芝鶴 我当（十三世仁左衛門）、蓑助（八世三津五郎）、吉田栄三と並んでいる。脚本朗読も岡鬼太郎の指導で昭和六年三学期から始まり 七年には前記の如く教室で公開、秋には山上各会連盟主催で日本青年館で公開公演をやり、九世団十郎追悼講演会、松居松翁追悼講演会、合宿等々目白押しの催事である。三田祭の実演一本に集中して一年間を過ごす現在の歌舞研の形と比較して感無量である。

この頃の会員数 16 名の中から 戸板康二、志野葉太郎、加賀山直三、川口子太郎などが出ているのだから菅沼が今の学生の実演には反対の信念を持っているというのも判る気がする。「浅黄幕」という会誌を復活させたのもこの昭和七年で 以後「三田歌舞伎研究」のタイトルで第 4 号まで出している。「浅黄幕」復活第 1 号には菅沼の投稿もあるのだが
「僕は原稿は書きません。えっ？ 載ってるって？ さあ覚えがないな。誰かが書いてくれたんじゃないかな」とのんきなことを云っていた。これらの期間の記事を「八十年史」にかなり詳細に記載できたのも、この日の菅沼談が大きく役立ったのである。

その行事の中の葉山合宿中に市村亀蔵を訪ねたとあることから、長唄杵屋勝三郎の話になった。杵勝会の現家元勝三郎は昭和 25 年卒で亀蔵の子息である。

「僕（菅沼）は長唄が好きでよく聴きに行きます。勝三郎とも親しく 毎回公演の切符を

送ってきてくれるけど 近頃は耳が遠くなってよく聞こえないから送らないでくれと云ってるんです」と云っていた。

勝三郎は僕（馬場）も親しくしていて 杵勝会のプログラムに原稿を書いたりしている。彼は前記亀蔵の息子で、兄さんも太郎という役者だったが戦死してしまった。亀蔵は十五世羽左衛門の芸養子で 勝三郎の母が嫁いだ人だが比較的早くに亡くなってしまった。勝三郎の家は代々実子が襲ぐことになっているが三世が若くて亡くなってから男子がなく四・五・六世と女性が家元として守って来たので、現勝三郎は生まれてすぐ七世を襲ぐと定められていた。然し彼は芸能界が好きでなく 14 才の時に勝三郎の名前は襲名させられていたが 大学卒業の頃まで長唄屋になるのが厭で親に内緒でサラリーマンになろうと就職試験を受けに行ったりした。それが判って小泉塾長に意見され、仕方なく披露演奏会に出て勉強しはじめたが まだはっきり心が決っていないまま昭和 29 年に吾妻徳穂のアズマカブキというのが海外公演をする時 長唄責任者として同行しロンドンのホテルで今の富十郎（徳穂の息で武智歌舞伎の扇鶴時代と騒がれた鶴之助）といっしょになったのが大きな転機となる。二人で愚痴をこぼし合っていたが、ヨーロッパの街を歩いていて石と土、パンと米という日本文化の根本的な違いを感じ 四季の変化に彩られ 音楽と云い 歌舞伎と云い日本のすばらしい文化に目覚めたような気がして 長唄で一生送る決心がついたと云う。

菅沼は長唄の話から続けて「今 安西さんと電話で話して来たところなんです。馬場さんといっしょに唄っているテープも持っています」

安西さんとは 安西英太郎氏で菅沼と同年令で健在、銀座四丁目の日本一値段の高い土地として有名な「大黒屋」のオーナーで現安西塾長と縁つづきだし 池田弥三郎教授とは従兄同士になる。塾高の先生だったが長唄、蘭八など邦楽に親しく、長研の名誉会員でもある。

「安西さんはいい声ですね。あのテープの「雨の四季」だったかな、池田弥三郎の作詞ですね」

長唄「雨の四季」は大正頃の文部省唱歌「四季の雨」の詩情をもとに江戸下町の風物を描いて昭和四十二年に作られた曲で、その中に“八ッ見の橋”というのが出てくる。これは新派の芝居で有名な泉鏡花の「日本橋」の中の一石橋いちこくに立つと橋が八ッ同時に見られるということから名づけられている。今でも大手町から三越本店に向う通りに在り 八ッは見えないがイメージすることはできる。日本橋、常盤橋 江戸橋 鍛冶橋 呉服橋 一石橋だが、足りない二ッは池田先生の洒落で歌詞の中に隠してあると安西先生に教わった。

“とさんどうさん行き交いの”という歌詞の中に道三橋どうさん “人の世うつす水の瀬せに家名も高き”の中に銭瓶橋ぜにびんで 二つとも今は橋はなく大通りに吸収されている。粹で洒脱な池田先生は歌舞研会長として 学生実演にこだわったいきさつは「八十年史」にくわしく書いてある。

「僕（菅沼）は長唄だけでなく 講釈、落語、何でも聴くのが好き。歌舞伎はこの頃幕見のあの階段登るのがつらいし TV でもドラマは好きだったけど耳がアレしてから見ませんよ。ナイターや角力は聞こえなくても判るから見ます。歩くのは好きで“三田あるこう会”では随分あちこち行きました。此頃は止めてるけど。夏にはノロノロ海岸を歩かし、買物もあのガラガラ引張る車で出かけます。連合三田会には毎年行くようにしている。学生の歌舞伎実演は反対だけど、どんなことをしてるのかと思って三田祭の公演を二回ぐらい覗いたことがある。「伊勢音頭」やってたかな。学生のやるのは脚本朗読まで、というのが信念です。三田祭ではいっづく頂戴に茶道会にも行きます。

映画も好きでね。学生時代に映画演劇の批評集を書いて謄写版で刷ってパラマウントやメトロに送ったらスチール写真を一ダース送ってきた。僕は経済学部だけどその頃は甲・乙とあって、乙が後の商学部になった。川口とどっちに行こうかと話し合っ、小泉信三が経済原論なので甲へ行きました。君（小柴）の叔父さんはチョロって仇名でね。いくら呑んでもチョロリとしている。商工からいっしょですよ。みんなお酒は強かった」

小柴君の叔父さんといっしょに鐘紡勤務になった菅沼は 四日市、京都、大阪の各工場のあるところに転々とし 京都ではもしほ時代の勘三郎と祇園で大いに遊んだりした。菅沼は七世中車夫人の甥なので、中車を叔父貴と呼んでいた。

鐘紡時代の話が次々にはずんで止まるところを知らぬ勢いで4時間以上アッという間に過ぎてしまう。冒頭に記したように、この談話の内容が雑音に消されて細かく再録できないのは誠に残念だが、この時代の歌舞研の在り方や会員の生態のいくらかでも識ってもらえるならば一と敢てこの報告文を提出する次第である。